

続・ 珈琲の思い出 38

鈴木優子

「和樹さんにはもっと会いたいな、と思って。」

「僕もだよ、優子さん。」

そう言うと、向かい合って座っていた二人は自然と顔を近づけて、見つめあった。

ああ、この人とキスがしたい。優子は猛烈に思った。

ああ、この人とキスがしたい。和樹は優子のこの柔らかかそうな唇を思う存分味わってみたい、と痛切に感じた。

火曜日、火曜日の夜。何とかして会えないだろうか。

あと二日、もう我慢できないかも知れない。

ヨガ教室が終わるのが8時。でも、やっぱりそれから会うとなると遅くなるから時間が足りない。

よし、思い切って今度のレッスンはサボっちゃおう!

優子が一人、心の中でほくそえんでいると、

和樹の携帯のメールの着信音が鳴った。

「あなた、どこにいるの?」妻の敏江からだった。

「ちよつと散歩してる。」

「じゃ、キャベツと豚バラ200買ってきて」

「わかった」

「ん?どうしたの?」優子が尋ねると、

「いや、なんでもないよ。そろそろ家に戻らなきゃ。」

「あ!ごめんなさい。遅くまで引き留めちゃって。」

「いやいや、いいんだよ!それより、火曜日の夜、楽しみにしてるから。」

「え?もう、会うつもりでいるの?」

「え?ちがうの??」

「もう、全く強引なんだから!」

「強引な人は嫌い?」和樹がいたずらそうな瞳で尋ねると、

「ううん、好きよ。」

じゃ、またメールするよ。そう言うと、和樹は二人分の会計を済ませると、そそくさと店を出て行った。(続く)